

研究会等の報告／予定

会議要項

第28回 PF シンポジウム開催のお知らせ

PF シンポジウム実行委員長 兵藤一行 (KEK・PF)

前号でもお知らせしましたとおり、第28回 PF シンポジウムは、2011年3月14日(月)～15日(火)に開催されます。第26回、第27回と同様、つくば国際会議場(エポカルつくば)での開催となりますので、皆様奮ってのご参加を宜しくお願い致します。

また、前日の3月13日(日)夕方には、ユーザーグループミーティングの開催ができるように会場を用意させていただきます。参加申し込み方法、プログラム等、詳細が決まり次第ホームページやPFニュースで皆様にお知らせ申し上げます。

PF シンポジウムに関してのお問い合わせは pf-sympo@pfiqst.kek.jp まで御連絡下さいませようお願い申し上げます。

物構研シンポジウム '10 「量子ビーム科学の展望」開催のお知らせ

物質構造科学研究所 下村 理

物構研は、加速器を用いた量子ビーム(放射光・中性子・ミュオン・低速陽電子)を、共同利用として多くのユーザーに提供していますが、その研究環境は大きく変わりつつあります。J-PARCの物質・生命科学実験施設では、世界最高強度の中性子・ミュオンを用いた利用研究が開始され、優れた成果が創出されつつあります。一方PFにおいては、5 GeVクラスのエネルギー回収型リニアック(ERL: Energy Recovery Linac)の実現を目指して、様々な研究開発が行われています。今年度の物構研シンポジウムでは、「量子ビーム科学の展望」をテーマとして、このような物構研の提供する量子ビームの将来展望について、ご議論頂きたいと考えています。

シンポジウム初日には、ERL計画に関する準備状況の報告や、今後さらに大強度化するJ-PARCでの中性子・ミュオン施設における将来構想の報告を予定しています。また、PETRA IIIやFLASHという先端的放射光源を持つドイツ電子シンクロトロン(DESY)から数名の研究者を招待し、Euro-FELを含めたDESYの将来計画についてお話を頂きます。2日目には、これらの将来光源の利用を視野に入れ、電子相関物性・局所構造物性・超分子構造物性に関する研究の将来展望を議論して頂く予定です。PFユーザーの皆様には、是非ご参加いただけますよう、お願い申し上げます。

日時: 2010年12月7日(火)、8日(水)
場所: つくば国際会議場(エポカルつくば)
主催: 高エネルギー加速器研究機構 物質構造科学研究所
協賛: 日本物理学会, 日本放射光学会, 日本中性子科学会, 日本中間子科学会, 日本結晶学会, 日本高圧力学会, 日本表面科学会

参加費: 無料

参加申込方法: シンポジウムホームページの参加申込フォームにてお申込下さい。旅費の支給を伴う参加の申し込みは締切ましたが、旅費支給を伴わない参加申込は当日まで受け付けます。

懇親会: 12月7日(火) 18:30-20:30を予定。詳細は決まり次第ホームページに掲載。

問い合わせ先: 物構研シンポジウム '10 事務局
(imss-sympo@pfiqst.kek.jp)

シンポジウムホームページ: <http://imss-sympo.kek.jp/2010/>
プログラム:

Dec. 7th (Tue), 2010

Opening

13:30-13:35 Welcome and Opening address:

Osamu Shimomura (KEK IMSS)

13:35-13:40 Guest Speech: from the MEXT

13:40-13:50 Introduction: Youichi Murakami (KEK IMSS)

Prospects of Quantum Beam Facilities

Chair: Susumu Ikeda (KEK IMSS)

13:50-14:15 Synchrotron Radiation: Hiroshi Kawata (KEK IMSS)

"ERL project as a Future Light Source"

14:15-14:35 Neutron: Hideki Seto (KEK IMSS)

"Prospects of Neutron Sciences at KENS"

14:35-14:50 Muon: Yasuhiro Miyake (KEK IMSS)

"Prospects explored by Intense Low Emittance Ultra Slow Muon Beam"

14:50-15:00 Positron: Toshio Hyodo (KEK IMSS)

"Slow Positron Facility at IMSS Photon Factory"

15:00-15:35 Break + Photo session

Chair: Kenji Ito (KEK IMSS)

15:35-16:05 Edgar Weckert (DESY)

"Prospects of Photon Science at DESY"

16:05-16:35 Yuri Shvyd'ko (APS)

"X-ray Free Electron Oscillator - R&D Progress"

16:35-17:05 Heinz Graafsma (DESY)

"Detector Developments at DESY for frontier Photon Science"

17:05-17:20 Shunji Kishimoto (KEK IMSS)

"IMSS Instrument R&D team and its recent results"

Poster Session (17:20-18:30)

Banquet (18:30-20:30)

Dec. 8th (Wed), 2010**Prospects of Correlated Electron Sciences***Chair: Shinichi Ito (KEK IMSS)*

- 9:00-9:30 Alfred Baron (RIKEN)
"Future of dynamics measurements using x-rays."
- 9:30-10:00 Taku J Sato (Tokyo Univ.)
"Observing spin fluctuations by neutrons; recent development of neutron inelastic spectroscopy"
- 10:00-10:30 Yasutomo Uemura (Columbia Univ.)
- 10:30-10:55 Break
- Chair: Ryosuke Kadono (KEK IMSS)*
- 10:55-11:25 Hatsumi Mori (Tokyo Univ.)
"Quantum Beam Science of Molecular Materials"
- 11:25-11:55 Yoshinori Tokura (Tokyo Univ., RIKEN)
"Topological spin textures and topological Hall effects"
- 11:55-13:00 Lunch

Prospects of Surface/Interface Sciences*Chair: Masaharu Nomura (KEK IMSS)*

- 13:00-13:30 Ryoji Kan-no (Tokyo Institute of Technology)
- 13:30-14:00 Hironori Nakao (KEK IMSS)
"Electronic and magnetic structure in artificial superlattice"
- 14:00-14:30 Jun Yoshinobu (Tokyo Univ.)
"Organic molecules on surfaces: from static towards dynamic pictures"
- 14:30-15:00 Katsuyuki Fukutani (Tokyo Univ.)
"Spin conversion and catalytic reaction of hydrogen at surfaces"
- 15:00-15:25 Break

Prospects of Bio/Soft Matter Sciences*Chair: Hideki Seto (KEK IMSS)*

- 15:25-15:55 Henry Chapman (DESY)
"Femtosecond Coherent X-ray Nanocrystallography at LCLS"
- 15:55-16:25 Yuya Shinohara (Tokyo Univ.)
"Dynamics of Nanocomposite revealed by X-ray Photon Correlation Spectroscopy"
- 16:25-16:55 Hitoshi Endou (Tokyo Univ.)
"Structure and Dynamics of Supramolecules Investigated by Contrast Variation Neutron Scattering"
- 16:55-17:25 Keiji Tanaka (Kyushu Univ.)
"Study on Structure and Dynamics of Polymers at Various Interfaces by Neutrons"

Closing

- 17:25-17:35 Concluding Remarks: Soichi Wakatsuki (KEK IMSS)

**KEK サマーチャレンジでの
物質・生命コース実施**

放射光科学第一研究系 伊藤健二

物質・生命コースが新設された第4回のKEK サマーチャレンジは、2010年8月21日(土)から8月29日(日)の9日間にわたり開催され、機構内外の多くの関係者の努力により無事終了しました。KEK サマーチャレンジは、素粒子および原子核分野の研究者が基礎科学の発展を担う人的資源が将来的に不足することを憂えて、大学生を対象にした従来には無いサマースクールを、高エネルギー加速器研究機構(KEK)にある施設を有効に利用する形で2007年から開催されています。サマーチャレンジの目ざすところは、わが国の将来を担う若者、特に大学3年生を対象にして、世界の第一線で活躍する研究者による直接の研究紹介の場を設け、研究の最先端に触れてもらうことから研究の喜びを実感する機会を提供し、意欲を持てば自分たちも最先端の研究に参入できることを体感してもらうことです。物質構造科学研究所でも創設以来若手の研究者にコミュニティーに入ってもらったための活動が続いているところですが、所内スタッフ中心での活動に若干の閉塞感を持っておりました。新しい展開を模索する中で、KEK サマーチャレンジの春山富義校長(素核研副所長)からKEK サマーチャレンジについて詳細なお話を伺うとともに、さらに共同開催のご提案もいただきました。物構研に持ち帰って検討を行い、所外の研究グループからのご意見も参考にしながら、今年度から「物質・生命コース」を新設して物構研もKEK サマーチャレンジに加わることにしました。

物構研としては初めての試みで、今回は6日間の開催としました。開校式とその直後のノーベル賞受賞者益川敏英先生による特別講義、見学ツアー、懇親会、キャリアビルディングなどは、素粒子・宇宙コースと物質・生命コースで共通のプログラムでした。

物質・生命コースの講義は、放射光、中性子、ミュオンの利用研究について基礎1から3まで、物質科学および生



演習の様子。モニターで位置を確認しながら装置を組み立てる。

物質・生命コース（6日間）のプログラム

		8月21日(土)					
8:45~	8月20日(金)	開校の辞 特別講演 益川敏英先生	8月22日(日)	8月23日(月)	8月24日(火)	8月25日(水)	8月26日(木)
9:00~10:00		物質科学1	物質科学1	KEKツアー1 共通 ・Bファクトリ ・放射光	東海ツアー 共通	物質科学3	発表準備
10:00~10:15		ブレイク	ブレイク			ブレイク	
10:15~11:15		基礎1	生命科学1			生命科学3	
11:15~11:30		ブレイク	ブレイク			ブレイク	
11:30~12:30		基礎2	物質科学2		物質科学4		
12:30~13:30		昼食			昼食		
13:30~14:30		基礎3	生命科学2		生命科学4	発表会	
14:30~14:40		ブレイク	ブレイク		ブレイク		
14:40~15:00		オリエンテーション					
15:00~18:00	受付	演習	演習	演習	演習		修了式
18:00~19:00		夕食会	夕食	夕食	懇親会	夕食	打上げ (希望者)
			演習	キャリア ビルディング		演習	

命科学でそれぞれ1から4までの講義が主として午前中に組まれており、11人の講師の先生にそれぞれ1時間の講義をお願いしました。普通の大学の講義では聞くことのできない最先端の研究に関する話に多くの学生の目は輝いているようでした。

演習がサマーチャレンジのメインイベントですが、物質・生命コースに参加した30名の学生は8テーマに分かれて演習をこなしました。学生は、物構研内外の研究者および大学院生の指導および助言などの下、様々なことを学び体験することができました。プログラム上では、およそ20時間が演習に当てられておりましたが、学生からも演習を担当された先生方からもこれでは不十分であったというご意見を頂いています。実際に演習最終日は夜を徹して明け方までがんばるグループも少なくありませんでした。

最先端の研究の現場を訪ねるツアーも大切な行事です。つくばツアーでは、BファクトリーとPFの見学が、午前中3時間半を使って行われました。また、東海ツアーは1日たっぷり時間を取って、J-PARCの物質・生命科学実験施設、ハドロン実験施設、ニュートリノ前置検出器などの見学を行いました。

素粒子・原子核コース担当の方々のお話では、結構盛り上がるのは、キャリアビルディングとのことでした。それは、学生と研究者との交流の場で、学生にとっては将来、研究者への道を選択するにあたり、先輩の研究者の経験から色んなヒントを得たことと思います。

6日目には、学生が演習の成果を披露する発表会が催されました。午前中は、発表資料作成に充てられました。発表は、口頭発表とポスター発表の二つの形式を採用しまし

【講義】

- 基礎1：足立伸一（KEK）「放射光利用研究の基礎」
- 基礎2：瀬戸秀紀（KEK）「中性子利用研究の基礎」
- 基礎3：小池洋二（東北大）「ミュオン利用研究の基礎」
- 物質科学1：尾嶋正治（東大）「放射光光電子分光を用いたグリーンナノテクデバイスの解析」
- 物質科学2：有馬孝尚（東北大）「X線、中性子回折による構造物性研究」
- 物質科学3：船守展正（東大）「放射光を用いた地球マントルの研究」
- 物質科学4：朝倉清高（北大）「Extended x-ray absorption fine structure(EXAFS)と触媒の原子レベル解析」
- 生命科学1：松村明（筑波大）「加速器の拓く新しい医学診療ー特に中性子捕捉療法についてー」
- 生命科学2：三木邦夫（京大）「放射光で明らかにするタンパク質の“かたち”と“はたらき”」
- 生命科学3：沼子千弥（徳島大）「蛍光X線で観る地球環境問題」
- 生命科学4：西野吉則（北大）「細胞の中の構造を観る」

【演習】

- 演習1：「物質の構造を調べてみよう～放射光・中性子を用いた回折実験～」
- 演習2：「超高圧力が切り開く極限の世界」
- 演習3：「タンパク質の形を見てみよう」
- 演習4：「放射光を測る～検出器のしくみとX線検出の実際～」
- 演習5：「質量分析器を組み立ててみよう」
- 演習6：「作って調べる光触媒～酸化チタンの表面をのぞいてみよう～」
- 演習7：「X線イメージングってなんだろう？」
- 演習8：「宇宙線を使ったミュオンスピン回転」

た。口頭発表での演習グループ毎の持ち時間は15分でした。特に実行委員会からの指導があったわけではありませんが、どの演習グループの発表においても、演習テーマの目的、実験、結果、議論、まとめなどで担当を決め、ほぼ全員の学生がマイクを握る構成になっていました。演習の初日に見られた余所余所しさとは違って、発表会でのチームワークには感嘆しました。質疑応答の時間も限られており、ポスター発表はそれを補いつつ、学生同士の交流をさらに深める意味でも有効でした。発表後、若槻壮市物構研副所長から物質・生命コースに参加した学生一人ごとに「未来の博士号」と書かれた修了証が手渡されました。また、春山校長からは、校長特別賞と称して、益川先生のサインとグループのメンバーの名前が書かれてある同氏の著書を各グループに一冊ずつプレゼントされ、「グループ内で回し読みをして、この数日間を共にしたメンバーと今後もつながりを持ってください。」とコメントされました。修了式後行われた打ち上げパーティーでは、夜遅くまで学生同士のにぎやかな会話が續いていました。

今回参加された学生は、4月下旬から5月末の間にWeb経由で参加申し込みをさせていただきました。物質・生命コースではおよそ50名の申込みがありましたが、参加申し込みの際提出していただいた700字程度の参加志望動機を参考に30人の方を選考させていただきました。講義、演習を担当していただいた先生方からのアンケートへの回答にも見られますが、「志望動機を持って参加した学生達のサマーチャレンジでの活動、そして6日間での成長を目の当たりにしますと、今回物質・生命コースを新設してよかった、そして来年度以降もぜひ継続して行きたい。」と考えています。物構研がサマーチャレンジへの参入を決める前から、加速器からの放射光、中性子、ミュオンの量子ビームを演習に取り入れるか否かの議論はありましたが、大学の夏期休暇、KEKでの加速器運転スケジュール等を考慮して最終的に今回は「オフライン」の演習を行うことにしました。果たして、アンケートの回答では、「量子ビームを取り入れることが望ましい。」との意見が圧倒的であります。来年度以降サマーチャレンジで物質・生命コースを継続していくためには、この大きな問題の打開を図りつつ、そのほかの件についていただいたコメント等も参考に



サマーチャレンジに参加した学生とスタッフ

して、物質科学と生命科学のコミュニティー拡大により貢献できるサマーチャレンジの姿を早急に詰める必要があります。今後とも皆様のご協力とご理解のほどよろしくお願ひします。

「XAFS 講習会（応用実習編）－蛍光 XAFS と時間分解 XAFS－」の開催報告

放射光科学第二研究系 仁谷浩明
放射光科学第二研究系 阿部 仁
放射光科学第一研究系 丹羽尉博
放射光科学第二研究系 野村昌治
先端研究施設共用促進事業 西野潤一
先端研究施設共用促進事業 阿刀田伸史

XAFS(X-ray Absorption Fine Structure: X線吸収微細構造)法は、材料科学や環境科学から生命科学に至るまで様々な分野で応用されており、また、放射光の利用により発展してきた代表的な構造解析手法です。近年は、大学ユーザーのみならず、民間企業ユーザーからの利用希望も多く、それに応える形で昨年は“入門実習編”と題してユーザーの裾野を広げる目的で講習会を開催しました。しかしながら、新規ユーザーの獲得と同様に既存ユーザーのレベルアップなくしてXAFSコミュニティの発展はあり得ません。そこで、今年は少し目線を変えて、既存ユーザーを対象に“応用実習編”と題してXAFS講習会を開催しました。内容は「蛍光 XAFS」と「時間分解 XAFS」を中心に設定し、これまでスタンダードな透過法でのXAFS測定しか経験のないユーザーに新しい測定の仕方を学んでいただくことに主眼を置きました。また、昨年は2日間での開催であったのに対し、これまで要望が多かった「解析」に関する講習日を1日追加して3日間の講習会としました。講習会のプログラムは以下の通りで行いました。

【10/7（木）】

12:00-14:30 放射線手続き



図1 一日目の高橋先生の講義の様子

- 14:30-15:00 受付
 15:00-15:10 開会・事務連絡 (KEK-PF・仁谷浩明)
 15:10-16:40 講義①蛍光 XAFS の原理と応用
 (広島大学・高橋嘉夫)
 16:40-18:10 講義②時間分解 XAFS の原理と応用
 (KEK-PF・野村昌治)

【10/8 (金)】

- 9:30-12:00 実習①蛍光 XAFS 測定 / 時間分解 XAFS 測定 *
 12:00-13:00 昼食
 13:00-17:00 実習②蛍光 XAFS 測定 / 時間分解 XAFS 測定 *
 19:00-21:00 懇親会

【10/9 (土)】

- 9:30-12:00 解析講義・実習①
 12:00-13:00 昼食
 13:00-15:30 解析講義・実習②

* 実習は蛍光コースと時間分解コースの選択制

今回は3日間合計で32名の参加者があり、内訳は5割が大学、4割が民間企業、残りが公的研究機関からの参加でした。

講習会の1日目は広島大学の高橋嘉夫教授にお越しいただき、「蛍光 XAFS の原理と応用」と題して講演を行っていただきました。透過法と蛍光法の違いから、実験での注意の解説や、PF, SPring-8 で実際に行われている高橋先生ご自身の研究紹介など、大変興味深いお話をいただきました。続いてPFの野村より「時間分解 XAFS の原理と応用」と題して、近年特に利用が進んでいる QuickXAFS 測定法や DispersiveXAFS 測定法に関する原理の解説や触媒開発への応用例などの紹介がありました。

2日目はあらかじめ申込時に決めていただいていたコース(蛍光 XAFS コースと時間分解 XAFS コース)に分かれて、実際にビームラインを使用しての装置解説と測定実習を行いました。蛍光コースではライト検出器や多素子 Ge-SSD の使用方法や、スリットやフィルターの選び方などを希薄試料の測定を通して体験しました。時間分解コースでは、in-situ での実験セットアップを実際に組み、QuickXAFS や DispersiveXAFS といった測定方法の手順や実験の注意点などを学習しました。このビームラインでの実習は昨年に引き続き参加者の評判も良く、「事前にイメージしていた実験方法と全く異なっていて勉強になった」、「自分の研究に応用できるかどうかの判断の参考になった」などの声をいただきました。

3日目は今回新たな試みとして XAFS データの解析に関する講義・実習ということで、XAFS 解析ソフトウェアの Athena, Artemis の使い方を中心に行いました。参加者の方にはノート PC を用意していただき、講義の進行に合わせて自身でもソフトウェアの操作を行っていただくというスタイルで進めました。解析実習は初めてでしたので準備不足などもありましたが、次回からも続けていこうと思います。

本講習会は3日間開催で最終日は土曜日ということも



図2 2日目の実習の様子(時間分解コース)

あり、あまり人が集まらないのではと心配していましたが、結果としては定員の30名を超す応募をいただきました。今後も毎年の開催を目指し、皆さんの新たな研究のお手伝いできればと思います。なお、講義に使用した資料は本講習会の Web (<http://pfwww.kek.jp/nitani/workshop/2010fall/>) よりダウンロードしてご覧いただけます。

VUVX-37 (VUVX 2010) について

東京大学物性研究所 柿崎明人

今年7月に開催された VUVX-37 の内容については、前号で岡本氏が要領よくまとめて書いておられるので、ここでは氏が触れなかったことについて述べたい。

専門分野を同じくするものが世界各地から集まる研究集会、いわゆる国際会議に参加するメリットの一つは、そこで行われる研究発表や意見交換で得た情報を自分自身の研究の発展に役立てられることである。会議で講演やポスター発表を行うことによって、これまで教科書や論文の著者名でしか知らなかった大先生と議論することができたり、同じ年代の研究者と意気投合して将来の国際共同研究の機会となることも少なくない。近年、日本で開催される国際会議数も増加し、放射光に関連する分野に限ってみても、ほとんど毎年のように開催されているといっている。海外で開催される会議への日本人参加者も右肩上がり、国際純粋応用物理学連合 (IUPAP) のもとで開催される会議の中には参加者の30%以上を日本人が占めるものもある。

表記の VUVX-37 は、IUPAP のもとで開催されてきた International Conference on X-ray and Inner Shell Processes (1962年から2008年まで21回開催) が Vacuum Ultraviolet Radiation Physics に関する国際会議 (1965年から2007年まで15回開催) にマージする形でバンクーバー (カナダ) で開催された。両者が一緒になった理由は、X-ray and Inner Shell の参加者が以前から減少傾向にあること、また、時代の経過とともにそれぞれの会議で発表される研究



図1 会議での一コマ (撮影：KEK・岡本淳氏)

成果のうち放射光を利用したものがその多くを占め、同じ研究対象について議論されることも頻繁になってきたこと、以前あったようなVUVとX線領域の境界が判然としなくなってしまったことなどである。双方の開催回数を加えたVUVX-37は、Vacuum Ultraviolet and X-ray PhysicsのConference seriesとしては最初の会議である。

VUVX-37の参加者は、両者が統合したことによる増加も期待されたが、前回のVUV-15(ベルリン)よりも少なく29カ国から458名(登録人数はこれより多い)であった。国別では、海を隔てた隣国ということもあってか日本が120名と最も多く、続いてドイツ(73名)、カナダ(66名)、米国(43名)、フランス(21名)などの順である。今回の特徴は、学生が全体の15%を占め、カナダからの参加者が多かったことである。国際会議は、若い人たちにとってポストドクや次のポジション探しの場として利用できるため、会議を開催することは、地元の若手研究者に研究発表だけでなく世界へ向けて進出する機会を与えることにもなる。実際、今回の会議でもそんな活動をしている頼もしい若者を何人も見ることができた。日本の若者が消極的だと思わないが、アジアやヨーロッパの若手が世界に向けて積極的であったことに較べておとなしく見えた。研究環境に恵まれていて国外で研究したり評価される必要性を感じてないということかもしれない。15年前に東京で開催されたVUV-11で活躍した当時の若手が現在の日本のVUVのアクティビティを支えており、若手研究者の育成は国際会議の開催意義の一つである。

VUVX-37は、参加者数こそ現地実行委員会(Co-chairs: A. Hitchcock, S. Urquhart)の予想よりも少なかったものの、よく準備され、その運営もスムーズで会議は成功裏に終了した。岡本氏があげている以外にも注目すべき研究成果があった。とくに、昨年稼働を始めたスタンフォードのXFELを利用した研究成果は今後のこの分野の発展を予見しているようでもあった。一方、プログラム構成がやや偏重しているという声も聞いた。また、Inner Shellの会議で活躍されていた参加者が少なく、2つの会議をマージしてVUVXとしたメリットはあまり活かされなかったように思う。VUVXは、VUVが光子エネルギーをX線領域まで拡げたConference seriesとしてその役割を果たしていくことになるかもしれない。

次回VUVX-38(VUVX 2013)は、合肥(Hefei, 中国)で開催される。開催地は、会議に合わせて開かれる

VUVXの国際科学委員会(ISC)で事前になされた開催提案を議論して決められる。地域に関して特に決まりがあるわけではないが、これまでアメリカ大陸、アジア地域、ヨーロッパ地域が輪番で選ばれている。次回に関しては、前回提案してバンクーバーと争った北京が再度立候補すると期待されていたが、会議開催日が近づいても具体的な提案がどこからもなされなかった。このため、会議の2週間前になってISCがアジア地域の全ての放射光施設にVUVX-38の提案を促した。この事態は、ちょうどその時期に浦項(Pohang, 韓国)の放射光アジア・オセアニアフォーラムに集まっていた各国の放射光施設代表者間でも話題となり、いくつかの施設が真剣に開催を検討することになった。その後、ISC開催の前夜になって合肥の国家同步輻射施設から上海の放射光施設と協議した結果をふまえた具体的な提案がなされた。合肥での開催については、2012年に同じ中国科学院が主催するXAFSや2013年同時期に北京で開催されるICPEACの会議との関係を心配する声もあったが、Ziyu Wu施設長は、上海でサテライトを開催すること、VUVX-38やサテライトをICPEACと重ならないスケジュールとすること、また、2013年までには合肥に完成する国際空港の利便性が良くなること、北京、上海両市から高速鉄道で行けること、大都会にはない魅力が合肥にあることなどを示して懸念を払拭した。提案者の熱意がISCの心配を一蹴して、VUVX-38は2013年夏に合肥で開催することに決まった。

今回の会議中、新たに設けたConference AwardとStudent Awardの授賞式とその受賞講演があった。Conference Awardは原子・分子分野ではU. Hergenbahnに、固体物理分野はE. Rotenbergに贈られた。また、Student Awardは台湾のS.-Y. Liuが受賞した。理研に籍をおいてSPring-8で行った研究が受賞対象である。両賞とも被推薦者の25%を日本人が占め、アクティビティの高さを示したが受賞にはいたらなかった。国内外から支持される被推薦者が少なかったことも一因であろう。結果について分析しても仕方ない。次回は日本人からも受賞者が現れることを期待したい。



図2 ウェルカムレセプションで談話する会議参加者たち (撮影：千葉大・坂本一之氏)